Japanese Association for Religious Studies

日意所持分」・「要文分　日意所持」に分けられ記されている。またこの他「醫抄　日意所持分」・「俗書分　日意所持分」・「歌抄分　日意所持分」・「物語抄分」に、『蒙求』や『古今和歌集』・『三国伝記』などの日意所持一般書などの記載も見受けられる。「御筆御書註文」・「台家聖教註文」の相違を挙げると、先の法量の違い以外に「御筆御書註文」の各丁には丁付がされているが、「台家聖教註文」には丁付がなされていない点が挙げられる。

ここに一つの問題点を指摘できる。それは、「御筆御書註文」の丁付が七丁から十四丁と丁数が飛んでいる点であり、つまり八丁より一三丁が散逸しているのである。本研究は「日意目録」の、かかる問題点に対する仮説の提示を試みるものである。

さて、ではいつから該当丁が散逸したのか、またこの丁には何が記されていたのか、仮説の提示を試みたい。『身延山史年表』をみると、明治四十一年（一九〇八）～四十三年（一九一〇）の二年間に三六五冊にものぼる身延歴代の書籍が修復されたことが記されている。「日意目録」もこの明治期の修復がなされたようで、それを示す題籤が表紙右上に付されている。つまり仮説1として、「日意目録」は明治四十一～四十三年の間に一度解かれており、この時に該当丁が抜けてしまったのではないかと思考されるのである。そうであるのならば他の修復書籍に合本された可能性も否定できない。また「日意目録」末尾には「日意目録」は寛永十六年まで梅平教円坊にあったことが記されており、この記述より仮説2として書籍の移動がなされたのはこの時だけであり、これより梅平教円坊にあったときに該当丁が散逸したとも考えられる。

ではこの丁には何が記されていたのかという点について考察したい。この点について「御筆御書註文」をみると「録内之分」・「録外之分御筆御書」・「録外御書註文　日意所持分」は日蓮遺文を録内御書・録外御書に区別していることがわかる。つまりこれより「録内御書註文　日意所持分」が抜けていると指摘できるのである。さらに丁付を見ても「録内之分」が一丁ヲ～二丁ウまで、「録外之分御筆御書」は二丁ウ～七丁ウまで、「録外御書註文　日意所持分」が十四丁ヲ～十七丁ウまでであり、全体構成から思考しても散逸部分には「録内御書註文　日意所持分」と指摘できるのである。

以上、「日意目録」の問題点と、かかる問題点に対する仮説の提示を試みた。身延山は明治八年の大火により日蓮遺文を焼失しており室町末期身延での日蓮遺文所蔵状態を見ることができる「日意目録」の丁数散逸は大きな問題であると指摘できる。

敬台院万姫と法華信仰――鎌倉鏡台寺の興廃をめぐって――

長倉　信祐

一、はじめに　敬台院万姫は徳川家康の曾孫で、徳島初代藩主蜂須賀至鎮正室に輿入れし、大石寺十七世日精上人の養母として大石寺門流を厚く外護した。敬台院は帰国に先立ち徳島敬台寺を開創したが、根津寿夫氏は『阿淡年表秘録』を踏まえ「江戸法詔寺と鎌倉鏡台寺を合わせ正保二年に敬台寺を建立」（取意）と言及していた。小稿は敬台寺開創をめぐる鎌倉鏡台

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

寺の興廃と江戸法詔寺の沿革を繙き、敬台院の法華信仰に再考を試みた。

二、鎌倉鏡台寺の興廃を示す諸文献の考察　鎌倉鏡台寺の名称は、寿円日仁師の『百六箇対見記』、選者未詳の『鎌倉敬台寺縁起』（要法寺文書）にあり、寛文十二年時点で門流周辺で認知された点や敬台院の子息忠英が円覚寺領をたぐって鏡台寺を開創した背景が伺える。ところで、貫達人氏は『鎌倉廃寺事典』に「鏡台寺　禅宗。所在地未詳。鏡台院が寛永十三年（一六三六）に仏日庵領大徳寺屋敷を買い取って建立した寺。七～八年後に廃された」（取意）と述べたが、論拠である「仏日庵訴状」（以下訴状）の史料的価値は未検討だった。筆者は『神奈川県史』の解読文、神奈川県立公文書館所蔵の原本写真と「仏日庵領大徳寺屋敷絵図」を照合し第一級史料と判断した。その理由は「鹿山略記」（鎌倉志料）、「鹿山略志」（前同）、「北條家氏政印判状」（鎌倉市史）に見える円覚寺塔頭仏日庵領大徳寺屋敷と鎌倉鏡台寺を結ぶ重要な文献だったからである。「訴状」には寛文十一年を遡る三十六年以前（寛永十三年）に敬台院が大徳寺屋敷を三十両で購入し鏡台寺を建立したが寛永二十年頃に滅却した経緯や屋敷から三丈程の高所に開山塔と松林があったと記されていた。大徳寺屋敷は後北条氏が仏日庵に与えた所領だが太閤検地で塔頭の所領は円覚寺に一括された為に管理が在家者に委ねられ、敬台院は大徳寺屋敷を購入し鏡台寺を開創できたが、蜂須賀家の菩提寺興源寺を通じ関東周辺の臨済宗旧跡をたぐらせたことも想像に難くない。事実、敬台院は徳川家康から安堵された化粧料地（徳島矢上村）にあった臨済宗正岡寺（せいこうじ）を敬台寺末正法寺（現在法華宗本門流）として改宗させている。

三、江戸法詔寺の本末関係をめぐる諸問題　敬台院が鎌倉鏡台寺を開創した目的は、江戸法詔寺を徳島に引いて敬台寺を開創する為だが、問題は法詔寺の寺跡と小梅常泉寺の本末関係だった。『常泉寺文書』（「口上覚」）に「芳春院殿妙囿日香様御事者先年寛永九壬申歳正月廿九日御吊之所者。神田明神前法詔寺と申寺御座候（中略）寛永十一甲戌歳二浅草鳥越エ引申候（中略）正保二乙酉歳年八月二法詔寺滅却仕候」とあり、敬台院は息女（芳春院）の葬儀を行った神田明神前法詔寺を寛永十一年に浅草鳥越に引いたが、正保二年に滅却した。芳春院の子息（池田光仲）が開創した日香寺の「由緒書」に「日香寺は寛文年中妙囿山光仲公御母芳春院君御菩提の爲に創建せられし処（中略）法華宗駿河富士郡大石寺の末寺たり（中略）寛永九年正月忠雄公夫人江戸に逝去せられ神田法浄（ママ）寺に葬る。後同寺阿波に移りてより御位牌を小梅常泉寺に安置し廟を富士大石寺に営まる」（鳥取藩史）とあり、事実、大石寺御影堂裏に芳春院五輪供養墓、敬台院逆修塔、大型寶篋印供養塔が現存する。また『東都三箇寺歴祖記』に「彼日解代浅草鳥越法詔寺（至鎮公簾中権現様孫姫阿州敬台院妙法日詔等之御建立寺也）成末寺、寛永廿年甲申年新古御改之刻、阿州徳嶋へ御引移、今ノ法詔山敬臺寺是也（大石寺末寺）被仰付」とあり、敬台院は常泉寺末として神田法詔寺を浅草鳥越に再建したが「新古御改」で徳島へ引寺した。敬台院は本来持仏堂で寺跡の無い法詔寺を常泉寺末とする手立てと同時に大徳寺屋敷を購入して鎌倉鏡台寺を開創し、その寺跡をもって法詔寺を引寺し徳島眉山の観音院跡地

NII-Electronic Library Service